



《古写経紹介・その十一》

菟足神社所蔵『大般若経』の欠筆と則天文字／楊 婷婷

年輪年代法と一切経経箱の制作年代／光谷 拓実

宋版一切経思溪版の版式転換 — 一紙六面から一紙五面へ —／佐々木 勇

《調査日記》

ニューヨーク公共図書館／南 宏信

《新刊紹介》

日本古写経善本叢刊第7、8、9輯／山野 千恵子、南 宏信、前島 信也

国際シンポジウム報告書『東アジア仏教写本研究』／山野 千恵子

既刊書

○『JAVU』1～6号(非売品)
本書は本学ホームページ「国際仏教学大学院大学学術成果コレクション」上からダウンロードできます。バックナンバーを希望される方は下記連絡先にお知らせ下さい。

○日本古写経善本叢刊(非売品)

- 第1輯『玄應撰一切経音義二十五卷』
- 第2輯『大乘起信論』
- 第3輯『金剛寺藏 觀無量壽經』
- 第4輯『集諸経禮懺儀卷下』
- 第5輯『書院部藏 無量壽経記』
- 第6輯『金剛寺藏 寶篋印陀羅尼經』
- 第7輯『國際佛教学大学院大學藏 金剛寺藏 摩訶止観 卷第一』
- 第8輯『續高僧傳 卷四卷六』
- 第9輯『高僧傳 卷五』
- 續高僧傳 卷二八卷二九卷三〇

○日本現存八種一切経対照目録(非売品)

本書は本学ホームページ「国際仏教学大学院大学学術成果コレクション」上からダウンロードできます。

○佛教学文獻と文学

日臺共同ワークショップの記録 2007(非売品)

○古写経研究の最前線

—シンポジウム講演資料集—(非売品)



スタッフ紹介

研究代表者

落合俊典(本学教授・学長)

研究分担者

アレックスフロリン(本学教授)

藤井教公(本学教授)

赤尾栄慶(京都国立博物館学芸部副部長)

(上席研究員)

高田時雄(京都大学名誉教授)

台湾国立成功大学客座教授)

金水 敏(大阪大学教授)

牧野和夫(実践女子大学教授)

本井牧子(筑波大学准教授)

林寺正俊(北海道大学准教授)

三宅徹誠(元興寺文化財研究所嘱託研究員)

学内研究協力者

今西順吉(本学教授)

後藤敏文(本学教授)

末木康弘(本学附属図書館副館長)

齐藤達也(本学附属図書館員)

堀伸一郎(本学附属国際仏教学研究所副所長)

前島信也・山野千恵子

(本学附属日本古写経研究所非常勤研究員)

赤塚祐道・小島裕子・田戸大智

(本学附属日本古写経研究所特任研究員)

プロジェクト研究員(PD)

上杉智英

プロジェクト研究補助員(RA)

奥村元康

(平成26年12月現在)

CONTENTS

Toshinori OCHIAI, Ugai Tetsujō: A Pioneer of the Japanese Buddhist Codicology	1
Tingting YANG, Lacunae and Characters Created by Empress Wu Zetian in the <i>Da bore jing</i> Manuscript of the Utari Shrine Collection	3
Takumi MITSUTANI, Dendrochronology and the Date of Wooden Boxes Storing the Buddhist Canon	5
Isamu SASAKI, Changes in the Format of the Sixti Edition of the Buddhist Canon Compiled in the Song Dynasty	7
Book Review	
Chieko YAMANO, Bibliotheca Codicologica Nipponica VII / Hironobu MINAMI, Bibliotheca Codicologica Nipponica VIII	9
Shinya MAEJIMA, Bibliotheca Codicologica Nipponica IX /	
Chieko YAMANO, International Symposium: Study on East Asian Buddhist Manuscripts	10
Hironobu MINAMI, New York Public Library: Manuscripts Research Notes	11
Symposia	12
Open Lectures	14
Publications, and Project members	15

文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「東アジア仏教写本研究拠点の形成」ニュースレター

Newsletter of the Strategic Research Project for Private Universities Granted by the Ministry of Education of Japan
'Establishment of the Research Centre for East Asian Buddhist Manuscripts'

いとくら 第10号

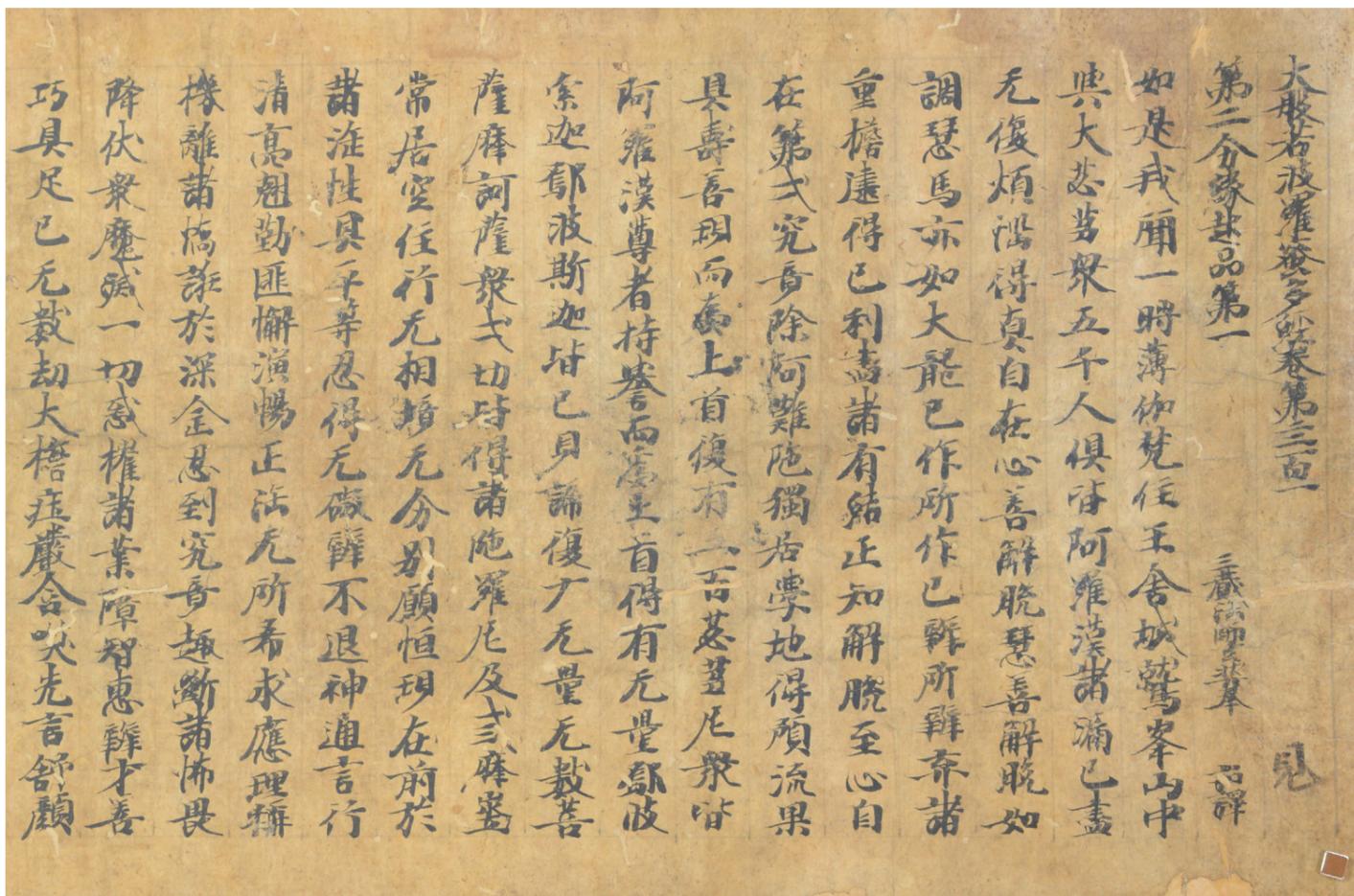
平成27年3月25日発行

編集・発行 国際仏教学大学院大学
日本古写経研究所
〒112-0003 東京都文京区春日2-8-9
URL <http://www.icabs.ac.jp>
E-mail nihonkoshakyo@icabs.ac.jp

印刷 株式会社 高山

ITOKURA Vol.X

Published by Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies
2-8-9 Kasuga, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0003, Japan
© Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies 2015
Printed in Japan at Takayama Co. Ltd., Tokyo



菟足神社蔵「大般若波羅蜜多經」卷第四百一 卷首

「菟」「現」「見」「境」に欠筆が認められる。

江戸時代は鎖国と士農工商の封建制度により経済が停滞したと言われることがありますが、各藩は江戸初期に暴れ川の治水に成功して米の収穫を飛躍的に伸ばしました。それは人口が千万人以上増えて、三千万近くまでなったことから分かります。生活に余裕ができた人々は種々なる方面に熱い視線を注ぎはじめました。

仏教研究にあつては江戸時代の僧侶の関心は幅広く、また深く掘り下げるようになってきました。福井の浄勝寺の丹山順藝（二七五～一八四七）は京都建仁寺の高麗蔵と黄檗版を校訂し、その異同を黄檗版に朱筆で記しましたが、魯魚の誤りを避けるために三校までしております。校訂完了の翌年、建仁寺の経蔵が失火に遭い、貴重な高麗版は灰燼に帰しました。そのためか浄土真宗の当局者は丹山順藝に命じてさらにもう一部校訂本を作らせました。現在、福井の浄勝寺と大谷大学にそれぞれ所蔵されています。

この大事業は現在殆ど忘れ去られていますが、やがて日本の仏教文献学研究の偉人として評価される時代が来ると信じます。

つぎに古写経研究に目を向けた人物として養鷗徹定（一八四一～一八九二）がいます。幕末から明治時代にかけて活躍した浄土宗の僧侶ですが、廃仏毀釈の逆風の時には耶蘇教排斥の論陣を張りました。一方で古写経の研究を行い、その成果が『古経題跋』や『古経搜索録』に反映しています。養鷗徹定の幅広い古写経探索には驚かされます。当時でも貴重な文化財を数多く熟覧しているのは仏教興隆に対する熱情以上のものがあつたに相違ありません。善本に邂逅できた喜びが十首の七言絶句（『古経搜索録』所収）に現れています。

目次

《巻頭言》		
養鷗 徹定 —日本古写経研究の先駆者—	落合 俊典	(1)
《古写経紹介 その十一》		
文字にみる中世写経の一形態		
菟足神社所蔵『大般若経』の欠筆と則天文字	楊 婷婷	(3)
経箱が語る施入の経緯		
年輪年代法と一切経経箱の制作年代	光谷 拓実	(5)
何故、五面の一紙は挟まれたのか		
宋版一切経思溪版の版式転換 —紙六面から一紙五面へ—	佐々木 勇	(7)
《新刊紹介》		
日本古寫経善本叢刊第七輯		
『国際佛教學大学院大學藏 金剛寺藏 摩訶止觀 卷第一』	山野 千恵子	(9)
日本古寫経善本叢刊第八輯		
『續高僧傳 卷四 卷六』	南 宏信	(9)
日本古寫経善本叢刊第九輯		
『高僧傳 卷五 續高僧傳 卷二八 卷二九 卷三〇』	前島 信也	(10)
国際シンポジウム報告書		
『東アジア仏教写本研究』	山野 千恵子	(10)
《調査日記》		
スポンサーコレクション中の仏典		
ニューヨーク公共図書館	南 宏信	(11)
《活動記録》		
国際学術検討会		
「仏教文献と文学」		(12)
国際シンポジウム		
「東アジア仏教写本研究」		(13)
公開研究会		(14)
既刊書・スタッフ紹介		(15)

いとくら：私たちが調査している古写経を収める「経蔵」からの造語。「経」を意味するサンスクリット語“sūtra”には「いと」などの意味があり、また「経」には「たていと」という読みがあることから、「経蔵」を「いとくら」と読んでニューズレターのタイトルとしました。

古隷精微筆有靈 瑞巖写出處胎経
陶家系讓二王法 堪擬焦山瘞鶴銘
古隷精微、筆に靈有り。瑞巖写出す處胎経。
陶家讓るに系す二王の法。焦山に擬するに堪えたり瘞鶴銘。

この絶句は、養鷗徹定が西魏の陶仵虎等書写の『菩薩處胎経』を賛したのですが、知恩院蔵の国宝「菩薩處胎経」には西魏の大統十六年（五五〇）に仏弟子陶仵虎等三十人が参集して「一切乘経」を写経したと書いてあります。伝世としては最古の写経本と言われていますが、実に素晴らしい隷書体の古写経です。陶家の書は王羲之、王献之の二王に繋がる書法であり、鎮江の焦山に伝わる瘞鶴銘に匹敵する書であると言われているのです。

しかし徹定は書の美のみを追及していたのではなく、本邦の古経の多くは隋唐の写経からの転写本であると強調しています（本邦古経多係隋唐以還之伝籍）。それら温故の経は新しき刊本の魯魚を訂正するものとの認識でした。つまり仏教テキストの研究が根底に存していたのです。

さて、日本の古写経の中で『金剛場陀羅尼経』と申しますと、奥書の干支と地名の考証から「わが国現存古写経の最古のもの」〔文化庁監修 国定書籍Ⅱ〕とされていますが、最近藤本孝一先生から興味深い話を耳にしました。そこで調べてみますと、養鷗徹定の跋文も付されていました。この箇所について本書を紹介する書物ではどういふ訳かみな無視していますが、藤本先生の説と同じ記述が見られるのです。

右丙戌天平十八年、婆羅門僧入国之歳
天平十八年では奈良時代になり、現存最古の写経とは言え

なくなります。この跋文の前には有名な奥書がありますが、その理解如何で書写年代が六十年変わることにあります。歳次丙戌年五月、川内國志貴評内知識、為七世父母及一切衆生、敬造金剛場陀羅尼經一部、籍此善因往生淨土終成成覺、教化僧寶林

志貴評の「評」は「那須国造碑（七〇〇頃）」にもその例があるように奈良時代以前の郡を指しています。ですから丙戌は六八六年以外あり得ないことになりました。天平十八年（七四六）説は「評」に対する基礎知識が無い人が書いたものとなり、どの解説も取り上げないようになつたのであります。

しかし、藤本先生は確かな考証にもついで天平十八年説を唱えているのだと思います。また養鷗徹定も根拠となることがあつて「天平十八年」を引いてきたのでしょう。日本最古の古写経が六十年後の写経となれば文化史上大事件になります。期せずして両者が同一説となつたのでありますから藤本先生の論文上梓が一日千秋の思いで俟たれるところです。

* * *

長らくご愛読いただきました「いとくら」は本号をもちまして休刊となります。平成十七年度から文部科学省の支援を得て、本学が日本古写経ならびに東アジア仏教写本研究の拠点となるべく邁進して参りましたが、古写経データベースの構築・善本叢刊（第一輯～第九輯）など当初の計画が達成されたと自負しております。今後は日本古写経研究所が当該研究の拠点として情報を発信していく予定です。

（本学プロジェクト「東アジア仏教写本研究拠点の形成」研究代表者）

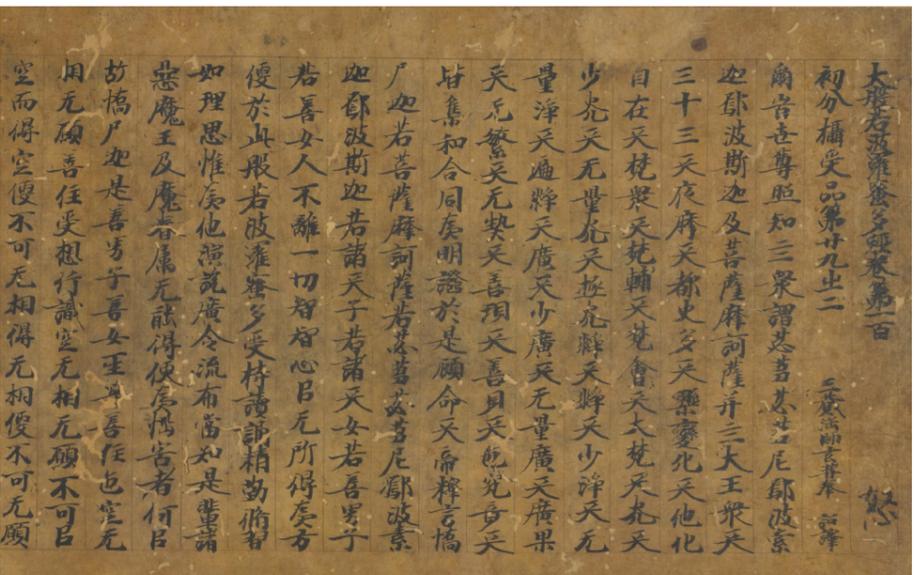
菟足神社所蔵

『大般若経』の欠筆と則天文字

楊 婷婷

一、菟足神社蔵『大般若経』の概況

現在、愛知県豊川市小坂井町に位置する菟足神社は天武天皇の御世（六八六年）、秦石勝によって現在地に遷座されたと伝えられる古社である。貴社には一九六一年六月三十日付で重要文化財指定された『大般若波羅蜜多経』が所蔵されている。総巻数は五八五巻であり、写本が五七五巻、刊本が十巻となっている。また写本の中には、昭和時代に補われた経巻十五巻、補写年代不明の経巻二巻が存している。五五八巻原写本の中で、元の奥書が残されている経巻は四八二巻にも及ぶ。



大般若波羅蜜多経巻第一百 巻首

一切経を納めたと伝えられている。年代は若干離れているが、高野山延寿院に納められた『銅鐘銘』には「安元二年二月六日 勸進入唐三度聖人重源」という記録があり、重源が一切経を将来したのは安元二年以前であろう。つまり、研究智が『大般若経』の書写を開始した安元二年三月には、既に開宝蔵、東禪寺版の宋版一切経が将来されていたことは確実である。

果たして菟足神社蔵『大般若経』の底本は宋刊本であろうか。菟足神社蔵『大般若経』巻第一の冒頭には「大唐三蔵聖教序」と「大唐皇帝述聖記」が見られる。一方、北宋開宝蔵系統に属する高麗再雕版や、南宋思溪版（愛知県豊屋寺所蔵）の『大般若経』巻一には上記の二文以外に、西明寺沙門玄則製の「大般若経初会序」が見られる。合わせて日本古写経を調べた結果、大阪府河内長野天野山金剛寺所蔵の『大般若経』は二部（甲本、乙本）あるが、どちらも「大唐三蔵聖教序」と「大唐皇帝述聖記」のみが見られる。つまり、菟足神社蔵『大般若経』の書写にあたり、宋刊本大蔵経は既に日本に伝来していたが、それが必ずしも底本とされた訳ではないようである。

◆根拠のない欠筆

北宋太祖皇帝の祖父の諱にあたる文字以外、菟足神社所蔵の『大般若経』の中には、また「故(故)」、發(發)、見(見)、現(xian)、覺(jue)、觀(guan)、撥(ba)、放(fang)、教(jiao)、敷(敷)、親(親)などの欠筆文字が見られる。これらは宋版一切経や日本古写経には見出せない欠筆であり、根拠が不明である。

しかし、視点を転換して、これらの文字を発音でなく、字の形で分類すれば、概ね二種類に区分される。つまり、「故、發、撥、放、教、敷」の「父」が付いている文字（「發、撥」については「又」の部分）と書かれていると「見、現、覺、觀、親」の「見」が付いている文字との二種である。

残念ながら、巻一から巻四の奥書は逸失したが、巻五には、同年三月九日書了一筆経内也研究智(花押)



大般若波羅蜜多経巻第五 奥書(右) 同 書写者[研究智(花押)] 拡大(左)

元奥書の全体を見渡せば、この大般若経の書写状況の一面を窺うことができる。書写の仕方は一人で全六〇〇巻を書写する一筆経であり、書写者は研究智と記される。

奥書からはこの人物が出家僧であるか、在家人であるか直ちに判別がつかない。調べたところ、「研究智」に関する記録はほかに確認できなかった。奥書に記録されている書写年代から計算すれば、研究智はほぼ二日一巻の進度で書写事業を進めたと推測される。巻九の奥書に「安元二年三月十七日」が見られることから、巻五の「同年」も同じく安元二年（一一七六）を指すことが分かる。さらに推測すれば、この大般若経の書写は恐らく安元二年三月一日から始まったのであろう。書写完成は治承三年（一一七九）八月であり、書写事業には三年七ヶ月がかかった。書写の場所については、現存の奥書を調べた限り、少なくとも四カ所が確認される。大まかに言えば、安元二年（一一七六）三月から治承元年（一一七七）十月廿三日は摂州小雀寺で、治承元年（一一七七）十一月廿三日のみは洛陽八条坊門猪熊御堂（巻二九七）で、治承元年（一一七七）十二月十一日から治承三年（一一七九）五月十九日は摂州河内南条富松庄で、治承三年（一一七九）六月十四日から治承三年（一一七九）八月廿二日は鎮西肥後国益城郡石津村六ヶ庄で書写が行われた。

「父」の最終の一面を省略したことは、「敬」字の欠筆を模倣するものではなからうか。



同様に、「見」の最終の一面を欠くのは形の類似する「竟」の欠筆を模倣するものと思われる。

三、則天文字について

菟足神社蔵『大般若経』には、上記の欠筆文字が見られるほか、則天文字も散見する。周知のように、則天文字は武則天が制定した漢字であり、武則天が皇位に就いていた十五年間（六九〇～七〇五）には広く使用され、中宗即位の神龍元年（七〇五）をもって廃止された。文宗の治世である開成二年（八三七）には則天文字を元の文字に直すことを命じる詔書が改めて頒布され、則天文字は使用されなくなったが、漢字文化圏の周辺諸国においては、特定の則天文字が使用され続けたとされている。字数については十二字、十六字、十七字、十八字、十九字、及び二十一字の諸説があり、現在のところ、照、天、地、日、月、星、君、臣、載、初、年、正、授、證、聖、國、人 の十七字説が有力である。調査した経巻の中には「照、天、地、日、月、星、年、正、授、證、聖、人」の漢字が散見するが、則天文字の使用例は「天、地、人」の三文字に集中している。



二、欠筆文字について

中国では古来より、主君や親などの目上に当たる者の諱（本名を呼ぶことは極めて無礼なことと考えられ、特に皇帝およびその祖先の諱については、時代によって厳しさは異なるが、諱あるいはそれに似た音の言葉を書いたり話したりすることを慎重に避けたという避諱文化がある。欠筆はその中の一種であり、該当文字の一面（通常は最終の一面）を記さないことである。欠筆による避諱は唐代に始まり、碑文などに良く見られるが、盛んになったのは宋代以後の刊本であると言われている。菟足神社所蔵の『大般若経』の中には、「故、敬、發、見、現、覺、觀、竟、境、鏡、撥、放、教、敷、驚、親」などに欠筆が見られる。

◆根拠のある欠筆

上記の欠筆文字の中、「敬(jing)、竟(jing)、境(jing)、鏡(jing)、驚(jing)」は明らかに北宋太祖皇帝の祖父趙敬(jing)の諱を避けるものである。これはどこからの影響であろうか。まず、安元二年（一一七六）を下限として宋版一切経の開版状況を確認する。

- 開宝蔵
- 北宋開宝四年(九七二)～太平興国八年(九八三)
- 東禪寺版
- 北宋元豊三年(一〇八〇)～政和二年(一一一一)
- 開元寺版
- 北宋政和二年(一一一一)～南宋紹興二十一年(一一五二)
- 思溪蔵
- 南宋靖康元年(一一二六)～紹興二年(一一三三)

淳佑年間(一二四一～一二五二)版木の修復・補刻」では、これらの宋版一切経はいづ日本に伝来したのか。ここに例として開宝蔵と東禪寺版の二つを挙げてみる。その一、開宝蔵は九八六年奄然によって将来され、法成寺に奉納された後、焼失した。その二、東禪寺版については、現在醍醐寺に所蔵されている宋版一切経は鎌倉時代の建久六年(一一九五)に重源が経蔵を建立し、中国からもたらした

おわりに

菟足神社所蔵『大般若経』の中には則天武后時代の写本からの転写本を連想させる則天文字と、宋刊本に由来する欠筆文字が同時に存在する。このように写本大蔵経と刊本大蔵経との痕跡が同一経典に統合されていることをどう考えたらよいのであろうか。勿論、文字の特殊性を念頭に置き、比較研究によって書写の際に使用された底本を追及することが一つの方法であるが、ここでは、これを日本における中国文化受容の一事象として捉えたい。

則天文字も欠筆も一定の期間内に中国で流行した文化であり、漢籍や經典に反映され、伝承されてきた。一方、日本では古くから遣隋使・遣唐使、そして入唐・入宋僧によって膨大な量の典籍が将来された。平安後期の日本では、学僧、あるいは知識人が、中国から伝わってきた典籍に反映されていた文化に影響を受け、自らそれを習得し、そして実践しようとした。研究智はまさにその中の一人であり、菟足神社所蔵の『大般若経』は彼が身につけていた文化的素養を実践した一例であろう。

調査にあたりご高配を賜りました宮司川出敏郎様、並びに氏子総代中村重蔵様に深く感謝申し上げます。

池田英淳「重源・白蓮社等の入宋と其意義」

〔浄土学〕十六号、二四二～二五二頁、一九四〇年
是沢恭三「菟足神社の大般若経解説 一附、同目錄」

菟足神社事務所、小坂井町教育委員会、一九七三年
蔵中進「則天文字―女帝の権力が生んだ―」

〔月刊しにか〕八巻六号、七二～七六頁、月刊しにか編集室、一九九七年
蔵中進「則天文字の研究」(翰林書房、一九九七年)

森克己「増補 日宋文化交流の諸問題」(勉誠出版、二〇一一年)
佐々木勇「親鸞の欠筆―親鸞が影響を受けた文献群―」

〔浄土真宗総合研究〕第八号、二〇一四
山本信吉「古典籍が語る―書物の文化史」(八木書店、二〇一四)

(上海師範大学 哲学学院 PD)

年輪年代法と

一切経経箱の制作年代

光谷 拓実

一、年輪年代法とは

二〇世紀初頭にA. E. ダグラス(アメリカ)によって考え出された年輪年代法は、欧米を中心に世界各国で実施されており、考古学、建築史、美術史への年代研究ばかりでなく、自然災害史などの研究分野にも広く応用されている。年輪年代法によって得られる測定年代には、誤差はなく、まさに画期的な年代測定法である。東アジアでは日本や韓国、中国などで本格的な研究がおこなわれている。

年輪年代法は、樹木年輪の変動変化に着目し、現在の年輪から過去の年輪へと順々にその変動パターン(年輪パターンと略す)を調べあげ、長期の暦年の確定した標準年輪パターン(暦年標準パターンと略す)を作成する。この暦年標準パターンがひとたび準備されると、年代不明木材の年輪パターンを調べ、これと暦年標準パターンとを照合



第183号(左):1284年、第172号(右):1284年

写真1 岩屋寺一切経箱

る。ほかの十九枚の板材の年輪年代はいずれも一二八四年より古い年代値を示している。こうした年代のばらつきは、板の外側を加工する際に削除された分の差によるものである。大きく削られたものであれば、当然のことながら伐採年代よりかなり古い年代を示すことになるので、得られた年輪年代の解釈にあたっては、注意が必要である。得られた調査結果についてまとめるとつぎのように要約される。

1. 経箱の用材はスギで、原木の伐採年代は、一二八四年直後と考えられる。したがって、経箱の制作年代も二八四年直後とみて間違いないものと思われる。
2. 二十一点の板材のなかで、同材関係(同じ材から木取りされた板)にあるものを以下の四グループに分類確認することができた。

- ・Aグループ… 第一〇号(蓋)、第一六号(蓋)、第一四号(蓋)、第一〇七号(底)
- ・Bグループ… 第一六号(蓋)、第三五号(蓋)、第九五号(蓋)、第一〇八号(底)、第一八七号(蓋)
- ・Cグループ… 第九八号(底)、第一五五号(蓋)
- ・Dグループ… 第五号(蓋)、第九号(蓋)
- ・Eグループ… 第二四号(蓋)、第一五六号(蓋)

する。双方の年輪パターンが合致するところが見つかる。と、暦年標準パターンの暦年をそのまま年代不明木材の年輪に置き換えることで、不明木材の年輪に対し、その形成年代が一年単位で確定する。その結果として、不明木材の伐採年や枯死年が判明する。こうして、得られた年代情報をもとに調査した古文化財の制作年代を推定することが可能となる。これが、年輪年代法の基本的な考え方である。

わが国で適用できる主要な樹種はヒノキとスギの二種類である。現在、測定可能な年代範囲はヒノキが約二九〇〇年間、スギが約三三〇〇年間の暦年標準パターンが作成済みである。したがって、この年代範囲のものであれば一年単位の年代測定が可能である。調査対象となるおもな木材は、古建築部材、美術工芸品(木工品)、遺跡出土木材、埋没木など多岐にわたる。

各種の木質古文化財のなかでも、好個の素材は年輪密度の高いヒノキやスギの柁目板材を使った唐櫃や文書箱類などがそれに該当し、このような文化財からの年輪データ収集は重要である。

これまでに、正倉院宝物木工品(おもに唐櫃や箱類)の年輪年代調査を実施したのを皮切りに、滋賀県石山寺所蔵の一切経経箱、奈良県興福寺一切経経箱、京都府高山寺文書箱(光谷拓実「関西大学博物館紀要」(二〇一三)掲載)などの年代調査を実施し、経箱の制作年代に直結する年代情報を得ることができた。

なかでも興福寺一切経の年代調査では、中国で開版されたあとあまり時を経ずして日本にもたらされ、到着後すぐに日本産のスギを使って経箱の製作がおこなわれたことが判明するなど、興味深い成果が得られた。このように経箱などの年輪年代調査は、寺に施入された経典と経箱の制作年代との時間的関係が判明することによって寺の歴史的背景をより一層詳しく読み解くことが可能となり、仏教史研究に資することができる。

3. これをみると別々の経箱に同じ材から木取りされた板材が蓋板や底板として使われていることから、一連の経箱は同一工房で同一時期に制作されたことがわかる。
4. 使用された原木の樹齢は、第三五号と第一八七号とのあいだでみられた同材関係から四一四年を超える老齢木(推定では五〇〇年以上)のスギ材が使われていたことがわかる。
4. 年代を割り出すにあたって使用したスギの基準パターンは近畿地域をカバーするものである。この基準パターンとの同調性は高いので、岩屋寺の経箱に使用されたスギ材も近畿地域のものと思われる。

つぎに、岩屋寺一切経経箱については京都に所在する高山寺のものが移入された可能性のあることが指摘されている。この点について検討するため、すでに二〇一〇年に高山寺一切経経箱の年輪年代調査を実施しているため、その結果についても紹介しておく。



高山寺一切経箱 第40号:鎌倉時代後期

二〇一二年度には、愛知県知多郡南知多町に所在する岩屋寺所蔵の思溪版一切経が納めてある経箱について年輪年代法による年代測定を実施する機会を得た。京都府京都市右京区梅ヶ畑梅尾町に所在する高山寺所蔵の経箱の年輪年代調査(二〇一〇年に実施)の結果とあわせて報告する。

二、岩屋寺一切経経箱の年輪年代調査(二〇一二年)

経箱の概要

- ・経箱の大きさ 横幅約35cm、長さ約40cm、高さ約180cm
- ・樹種 スギ(Cryptomeria japonica)

調査方法

経箱のなかからできるだけ年輪密度の高い蓋と底板を調査対象とし、デジタルカメラによる計測用年輪画像を撮影、そこから年輪幅の計測値データの収集作業をおこなった。収集した各板材の年輪データは近畿地域をカバーするスギの暦年標準パターン(七一八年〜一二五三年)を使用することとした。

調査点数

三十三箱から蓋板二十五枚、底板十一枚の三十六点を選定し、このうち蓋板十六枚、底板五枚の総数二十一点について年輪データが収集できた。

結果

スギの暦年標準パターンとの照合の結果、二十一点すべての板材に年輪年代(板材の最外年輪の年代測定値をいう)が確定した(光谷拓実「宋版大藏経研究の現在 講演資料集」二〇一三)。年輪年代が確定したもののなかで、とくに注目されるのが辺材が幅広く残存した第一七二号蓋(辺材幅5.0cm)と第一八三号蓋(辺材幅4.2cm)の二点(写真1)から得られた同一の年代値一二八四年である。この二点の辺材幅は樹皮近くまで残存しているものと思われるので、二点の年輪年代一二八四年は原木の伐採年代に限りなく近い年代である。

三、京都高山寺一切経経箱の年輪年代調査(二〇一〇年)

経箱の概要

- ・文書箱の大きさ 横幅約35cm、長さ約40cm、高さ約25cm
- ・樹種 スギ(Cryptomeria japonica)

経箱の大きさは岩屋寺一切経経箱のサイズとほぼ同じである。調査した経箱の総数は十九箱、二十三枚の板材について実施した。

結果

調査結果をみると、平安時代後期のものとしては五箱、五枚の板から一〇三年+a層〜一一五年+a層にかけての年輪年代が確認された。一方、鎌倉時代前期のものは六箱、八枚の板から一一八八年+a層〜一二四六年+a層にかけてのものがあり、鎌倉時代後期の板は二箱、二枚から一二八一年+a層、一二八五年+a層の年輪年代を示すものが確認された。

つぎに高山寺一切経経箱の結果と岩屋寺一切経経箱の調査結果とを対比してみることにする。岩屋寺一切経経箱の年輪年代のなかで、一二八四年の年代値と符号するのは高山寺経箱のなかの鎌倉時代後期の年輪年代を示した第一二四号(二八一年+a層)と第四〇号(二八五年+a層)の二箱に使われていた板の年輪年代がそれに該当する。このことから、岩屋寺一切経経箱が高山寺一切経経箱とほぼ同時期に制作されたものであることがわかる。

このように、一切経経箱の年輪年代調査は、各寺院に施入された歴史的経緯を復元することに資することができるだけでなく、年輪年代学研究にとっても貴重な年輪データが収集できる重要な素材であることを強調しておきたい。

光谷拓実「高山寺経函の年代測定と石水院の旧形復原」

「関西大学博物館紀要」第一八号(二〇一二年)

光谷拓実「年輪年代法による一切経経箱年代調査」

「宋版大藏経研究の現在 講演資料集」(二〇一三年)

(奈良文化財研究所 客員研究員)

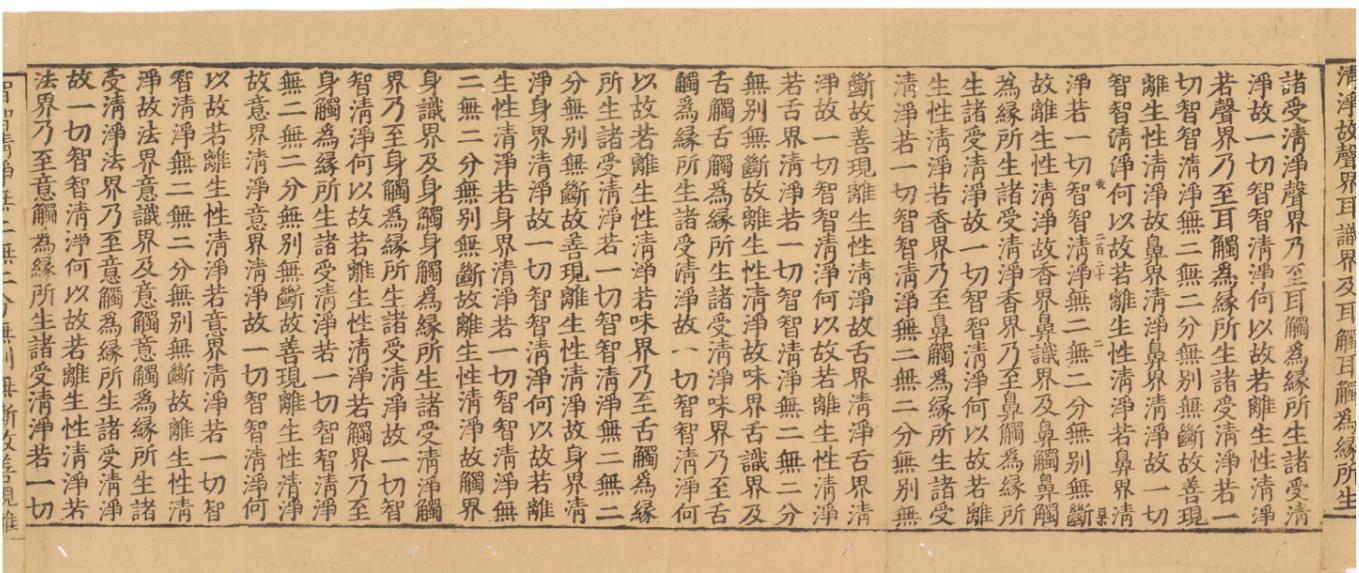
宋版一切経思溪版の版式転換

―紙六面から一紙五面へ―

佐々木 勇

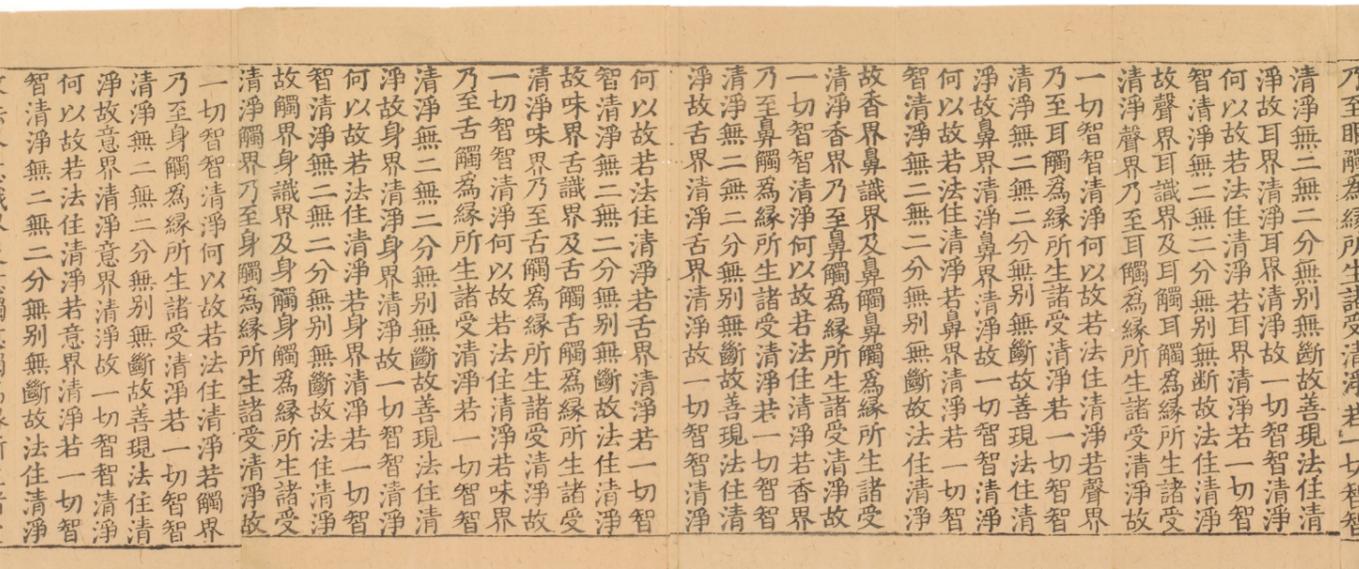
去る二〇一四年九月二十五日から二十七日までの三日間、落合俊典先生のお取りはからいで、尾張高野山岩屋寺尊蔵宋版一切経思溪版の調査に参加させていただいた。岩屋寺御住職後藤泰真殿下はじめ岩屋寺総代・地域の皆様に御支援いただき、充実した原本調査を成すことができた。心中より御礼申しあげる。

この調査で、かねてより原本確認を希望していた思溪版の版式転換点を見ることができた。



岩屋寺蔵 思溪版『大般若波羅蜜多經』卷第二百二十 一紙六面

*紙継ぎ箇所を▲にて示す。



岩屋寺蔵 思溪版『大般若波羅蜜多經』卷第二百二十一 一紙五面

宋版一切経東禪寺版・開元寺版(福州版)は、一紙六面を基本とする。ところが、続く思溪版は、一紙五面となる。

しかし、思溪版においても、第一帙千字文天より始まる『大般若波羅蜜多經』巻第一―巻第二百二十までは、一紙六面であることが報告されていた。岩屋寺蔵思溪版においても、左写真のごとく、従来の指摘の通りであった。

このように、思溪版において、福州版の版式を引き継ぐ方式から、一紙五面方式に変更したのは、なぜであろうか。この謎を解く鍵は、福州版と思溪版『大般若波羅蜜多經』巻第二百二十までに挿入された、五面の一紙が握っている。

本稿の筆者は、重要文化財醍醐寺蔵宋版一切経の悉皆調査に加わり、東禪寺版に親しく接する幸運に恵まれている。

醍醐寺蔵東禪寺版では、第237寸函「中論」巻第二―巻第四の三帖から、紙数の多い帖に、五面の一紙が挿入されている。その

中で、題記の年月が最も早いのは、巻第四の「元祐九年(一〇九四)正月 日」である(巻第二―第三は、翌月「元祐九年二月 日」題記)。その「中論」巻第四は、第十三板を五面とする。この第十三紙以外は六面で、全二十三板である。以下、元祐九年以降刊刻の十八板を超える帖では、五面の一紙を挿入することが原則となる。すでに指摘される通り、五面の一紙は、一帖の中間に挟まれる。

この東禪寺版における五面の一紙に、右の問いの解を導く一文が刻されていた。

第237寸函「中論」巻第二の第十二板には、第五面一行目下空白に、「此帙除六行媿得粘縫兩邊無厚薄」の一行を刻す。

醍醐寺蔵 東禪寺版「中論」巻第二 第十二板

(全体の写真は、二〇一五年三月刊行予定の目録影印篇に掲載される。)

第十二板は、経本文は五面であり、第六面は、空白である。この第十二板に続けて裏表紙を貼り、続く第十三板から裏面に印刷する。全二十三板である。

続く「中論」巻第三は、全二十四板で、やはり、第十三板の経文を五面までとし、元祐九年の第六面右端に、同一の刻文を記す。以下、醍醐寺蔵東禪寺版全体で、五面の一紙に限り、二十三の類例を見出せる。

右の問題を、すべての紙を五面とすることで解決したのが、『大般若波羅蜜多經』巻第二百二十一以降の思溪版である。

ただし、思溪版でも、千字文118伏・119戒・120羌函などに、福州版と同じく一紙六面で、第一面と第二面との間に柱刻が有る帖が存することを、上杉智英氏から調査時にお教えいただいた。「華嚴經(六十卷本)も同様であった。これらの函の經典は、長谷寺蔵思溪版においても一紙六面で、「異版」とされている。

なお、一紙六面が基本であった福州版と思溪版開始部分とは、第一面と第二面との間に置いていた「寸 參卷拾參 吳宗刀」などの柱刻を、五面一紙の次紙から、第二面と第三面との間に移動させている。この工夫が、思溪版の柱刻を紙継ぎ位置に隠すことに繋がる、と筆者は推定している。詳しくは、拙稿「宋版一切経東禪寺版に五面の一紙が挿入された理由」(広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部63号、二〇一四年十二月)を、御覧願いたい。

【参考文献】

- ・奈良県大般若経調査報告書 一本文篇(一)同 資料篇一
- ・一九九二年、奈良県教育委員会
- ・牧野和夫「關於宋版大藏經中」一版五葉三十行 版片的考察」
- ・「藏外佛教文獻」第十四輯、二〇一〇年八月
- ・同右「高野山金剛峯寺蔵『四分律蔵』(宋版大藏經ノ内)について」
- ・「かがみ」第四十二号、二〇一二年三月
- ・「豊山長谷寺拾遺 第四輯之一 宋版一切経」(二〇一一年)
- ・「付記」写真掲載の御許可を賜りました岩屋寺ならびに醍醐寺御当局に、甚深の謝意を表します。
- ・(広島大学大学院教育学研究科教授)

この注記は、すでに刊行されている目録類、「共同研究 ―本源寺蔵宋版一切経調査報告―」(同朋学園佛教文化研究所紀要)創刊号、一九七九年三月)や「神奈川県立金沢文庫保管 宋版一切経目録」(一九九八年三月、神奈川県立金沢文庫)の「刻施」備考」項目にも見られ、本源寺蔵本の記文は、口絵写真でも確認できる。それらは、醍醐寺蔵本の刻記と一致し、醍醐寺蔵本のそれに含まれる。

また、東寺蔵宋版一切経東禪寺版「中論」巻第二にも、醍醐寺蔵本と同じ位置(第十二板第五面一行目下空白)に、醍醐寺蔵本と同文の注記が存することを、原本で確認済みである。

醍醐寺蔵東禪寺版における「此帙除六行要粘策二邊不厚薄」等の記文を、同文をまとめて掲げれば、左の a g となる。

- a 此帙除六行媿得粘縫兩邊無厚薄
- b 除六行要粘策二邊不厚薄
- c 此帙除六行要粘策二邊不厚薄
- d 除此六行要粘策二邊不厚薄
- e 此帙除六行要粘冊二邊不厚薄
- f 除六行要粘策二邊無厚薄
- g 除六行要粘策二邊

右「此帙除六行」の注記は、一紙五面の紙にのみ存した。よって、「此帙除六行」除此六行「除六行」は、一紙(板)三十六行(每半折六行六面)である東禪寺版の六行を除し、一紙三十行とすることである。すなわち、右の記文は、その一紙の六行一面を取り去り、五面とすることの断わり書きである。

全文同主旨と考えられるため、最多例が見られた b「除六行要粘策二邊不厚薄」を解釈する。a の「得」に対応する「要」は、補助動詞であろう。「粘」は、a の「粘縫」に相当する。「紙を貼り継ぐ」ことであろう。「策」は e「冊」と同意で、帖装(経摺装)の一冊のことと解釈される。そうであれば、「二邊」は、帖の長辺左右の二邊であろう。「不厚薄」は、「厚薄」を作らないことであろう。

したがって、「除六行要粘策二邊不厚薄」は、「多くの紙を貼り合わせたこの一冊に、紙継ぎによる左右二邊の厚みの差が生じないように、この紙の六行一面を除く」意、と解釈できる。

全紙を六面とし、それを貼り合わせて折り、帖装とすれば、紙継ぎ位置は必ず右邊になる。そのため、紙数の多い帖では、右邊が左邊より厚くなる。これを避けるため、帖の中間に五面の一紙を挿入し、以降の紙継ぎを左邊に移動させた。一面六行を誤脱したものではない、とこの注記は

新刊紹介

日本古寫經善本叢刊第七輯

『國際佛教學大学院大學藏 金剛寺藏 摩訶止觀 卷第一』

『摩訶止觀』は天台宗の基本典籍として知られているが、古い時代の写本は驚くほど少ない。池麗梅氏が本書の中で紹介しているように、中国本土では、唐宋の戦乱や会昌の廃仏により、天台の典籍が散逸してしまったため、それ以前に日本や朝鮮に伝えられた典籍が、五代の時代に逆輸入されたという。日本古写經善本叢刊第七輯に収められている『摩訶止觀』巻第一の二本の写本は、このように古くに日本に伝えられ、書写されてきたものである。

二本の写本のうち最初に紹介する国際佛教学大学院大学本は、もとは石山寺に所蔵されていたもので、書体や加点などから平安中期の書写とされている。現存する最古の『摩訶止觀』の写本である。この写本は、朱・白・緑・黒の訓点に加えられていることを一大特徴とする。複雑極まるヲコト点や声点が付された本文の訓読は、国語学の金水敏先生の監修の元、廣坂直子氏が担当した。本写本の訓点についての国語学上の所見は、両氏による解題に詳しい。

次に紹介する金剛寺本は、平安後期に書写されたもので、国際佛教学大学院大学本に次

日本古寫經善本叢刊第九輯

『高僧傳 卷五』

『續高僧傳 卷二八 卷二九 卷三〇』

『高僧傳』は、中国の後漢・明帝の時代から南北朝の梁代までに活躍した僧侶の伝記を収録したものであり、その後の道宣『続高僧傳』や贊寧『宋高僧傳』といった僧伝文献の先駆けとして成立した文献である。

現在、『高僧傳』に関する研究の多くは宋代以降に成立した刊本大藏經に依っており、特にその成立や後世の加筆・省略といった問題については未だ不明な部分が多く、刊本大藏經の『高僧傳』の内容がいかにほどに原形を留めているかについては明らかになってはいない。

本書はその『高僧傳』研究の一助とすべく、日本古写經における『高僧傳』の影印・翻刻を収録するものである。大阪府金剛寺所蔵本巻五を基本として、その内容に相当する愛知県七寺所蔵本巻五、京都府興聖寺所蔵本巻三・巻四、大阪府四天王寺所蔵本巻三・巻四を、上海師範大学准教授・定源(主招國)氏が翻刻・対校を行っている。

これらの日本古写經群の『高僧傳』と刊本大藏經のそれとは、調卷や収録人数の違い、本文の増略などの違いが挙げられ、これらの点については本書の中で定源(主招國)氏によって考察が加えられている。これによって、刊本大藏經とは異なる系統の高僧傳が挙げられ、『高僧傳』研究の新たな視座が確立されたと考えられる。

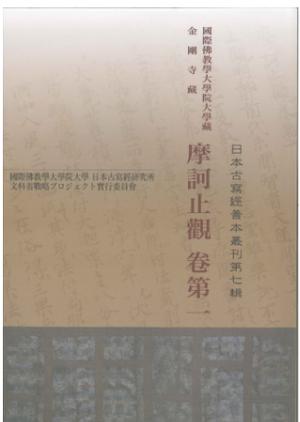
『続高僧傳』篇では、昨年発刊の第八輯に収録された金剛寺本や七寺本といった平安鎌倉写經『続高僧傳』ではなく、奈良写經である光明皇后五月一日御願經の『続高僧傳』を取り上

ぐ古い写本の一つである。金剛寺には巻第一の他、巻第二・第四・第五中・第七、合計五帖が現存している。この写本にも全面に渡って詳細な訓点が行われている。この金剛寺本の訓読の特徴については、仏教学の藤井教公先生が解題の中で分析を行っている。訓読は上杉智英氏が担当した。

論攷編には池麗梅氏の『摩訶止觀』の往還から見た東アジア文化交流史の一齣』を掲載している。本論は、国際佛教学大学院大学本と金剛寺本、二本の写本の本文を、宋代の刊本と比較し、その系譜を詳細に検討したものである。また付録として、国際佛教学大学院大学の各刊本と対校した『摩訶止觀』巻第一諸本校異」が付されている。

以上のように、本書は、天台宗学の研究者のみならず、国語学や、写本学など、様々な分野の研究者に興味深い研究資料を提供し得るものである。ぜひ手に取ってもらいたい。

(編輯担当 山野千恵子)



日本古写經善本叢刊第七輯

日本古寫經善本叢刊第八輯
『續高僧傳 卷四 卷六』

『続高僧傳』とは、南朝梁代の慧皎(四九七―五五四)撰『高僧傳』を継ぎ、唐代南山律の開祖として知られる仏教学家道宣(五九六―六六七)が六世紀初頭から七世紀中頃までに活躍した高僧たちの事跡を編纂した史伝です。複雑な成立過程に関して以前より諸本間の異同が指摘されていますが、十全な解明には至っていません。

本書は日本古写經と刊本大藏經との間で異同の顕著な玄奘伝を収める巻四、並びに諸本の系譜を考察する上で重要な示唆を供するであろう巻六の古写經本を影印で紹介し、解題、論攷を付すことで、『続高僧傳』研究の新たな基盤を提示するものです。

玄奘伝を掲載する巻四は斉藤達也氏が担当し金剛寺本を中心に七寺本・興聖寺本の関係を考察、以下の三点を指摘します。

まず全体の伝目や巻四玄奘伝の特徴から金剛寺本は版本系のみならず日本古写經本中でも興聖寺本より古い形態を保持している可能性が高いことを挙げます。

次に金剛寺本中でも玄奘伝の祖本は貞観二〇―二二(六四六―六四八)年間に編集されたとします。これは玄奘生前の成立であり、かつ後人の改変を含まないものとして最古に当ります。

最後に『瑜伽師地論』三十巻を翻訳した時の玄奘の年齢は従来の三十五歳ではな

国際シンポジウム報告書

『東アジア仏教写本研究』

戦略プロジェクト最終年度に開催された国際シンポジウム「東アジア仏教写本研究」は、五年にわたるプロジェクトの研究成果を集大成したシンポジウムとなった。この成果を一冊の論文集としてまとめたのが本報告書である。

巻頭を飾るのは、ジャン＝ノエル・ロペール氏によるシンポジウムの総評である。プログラムの最後の講演を原稿にしたものだが、フランスを代表する知性から見た東アジア仏教写本研究の意義と展望は、この報告書のキーノートとして巻頭を飾るに相応しい内容となっている。テキスト研究や写本研究に従事する者に、多くの示唆と刺激を与えるに違いない。

続いて、報告書は部会ごとにとまとめられ、全体で四部構成となっている。第一部「大乘義章」は、『大乘義章』をテーマとした文献研究をまとめたものである。岡本一平氏は『大乘義章』のテキストの系譜について、田戸大智氏は日本における論義関連資料について、金天鶴氏は新羅仏教における『大乘義章』の受容について、三者三様の視点から最新の研究成果を発表している。三氏の発表に対するコメントは養輪顕量氏に寄稿してもらった。

第二部「在家人布薩法」は、本プロジェクトの調査によって発見された写本「在家人布薩法」の研究をまとめたものである。新出写本の調査にあたった赤尾栄慶氏、落合俊典氏が本写本の書誌学的研究を、またシルヴィ・ユ―

ク、四十五歳であるということ。以上を指摘によって既存研究を再検討する必要性を喚起します。

巻六は池麗梅氏が担当し、国会図書館本(旧法隆寺蔵本)・金剛寺本・七寺本・興聖寺本の日本古写經本は、細部まで刊本系統と相違することから現存最古の形態を留めたテキストであることを確認し、刊本の諸系統の中では初期開宝藏系統本(大藏經綱目指要録)に基づくにより近いことを指摘します。ただし興聖寺本は他の日本古写經本だけに見られる特徴を保持しながらも、初期開宝藏系統本に近寄りを見せていることに注目し、その原因は初期開宝藏系統本に基づいて部分的に校訂・増補したことに起因するものだと推察します。

巻末には大正蔵本と古写經本との各伝記対照表を付し(斉藤作成)、『続高僧傳』全体の構成を一瞥できるようにしました。

本書が『続高僧傳』研究の更なる発展・解明に貢献することを期待しています。

(編輯担当 南 宏信)



日本古写經善本叢刊第八輯

ロ氏が本文研究を発表している。

第三部「テキスト研究の展開」では、近年、調査が進展している日本、韓国のような仏教写本の研究を概観できる。楊婷婷氏、小島裕子氏、金水敏氏、山田昇平氏、中野直樹氏、辛鳴静志氏、林寺正俊氏、崔鉉植氏、落合俊典氏、赤尾栄慶氏、総勢十名による研究は、国語学、中国語学、書誌学、テキスト研究、思想研究等、様々な視点から、仏教写本にアプローチしたものである。

第四部「高僧傳・続高僧傳」は、日本に現存する『高僧傳』『続高僧傳』の写本についての研究をまとめたものである。定源氏は『高僧傳』の現存写本の系譜について、斉藤達也氏は七寺一切経中の『続高僧傳』について、池麗梅氏は五月一日経本『続高僧傳』について、最新の研究成果を発表している。三氏の発表に対するコメントは齋藤智寛氏に寄稿してもらった。

以上のように、本報告書は漢語仏教写本に関する最新の研究成果を概観することができ、写本研究における様々なアプローチと方法論を学ぶことのできる一冊となっている。

(編輯担当 山野千恵子)



国際シンポジウム報告書 東アジア仏教写本研究

ニューヨーク公共図書館

ニューヨーク公共図書館

ニューヨーク公共図書館は一九一一年ニューヨークマンハッタン地区五番街四二丁目に竣工され、非営利民間団体(NPO)が運営する公共の図書館です。現在その全所蔵品は五三〇〇万点にのぼり、世界有数のコレクションを誇りつつも、広く市民に開かれていて有名です。起業や芸術の支援、医療情報などが充実しており、ITを活用して市民に提供しています。その活動はIT時代の渦中において今後の図書館の在り方を牽引するものです。

スペインコレクション

ウィリアム・オーガスタス・スペンサー(一八七〇―一九二二)は豪華客船タイタニック号の沈没事故により急逝したアメリカの実業家です。スペンサーコレクションの設立は彼の遺言状に従い一九二七年、寡婦が彼の基金と愛蔵書二三二部を同図書館に寄贈したことが契機となります。彼の遺志に従って世界四、五〇か国に渡り貴重書籍の蒐集事業を継続し、現在の蔵書数は八千部を越

えます。日本からは室町以降、殊に江戸時代の絵入り本及び絵本類を購入します。これは一九四三年から三十余年間にわたって同コレクションの責任者を勤めたカール・クープの炯眼と努力によるものです。この蒐集事業に一役買ったのが反町茂雄(一九〇一―一九九二)です。

弘文荘主人反町茂雄

氏は、目録販売(『弘文荘待買古書目』)で稀観書を取引した古書肆弘文荘主人であり、世界を股にかけて活躍した古書籍商・書誌学者です。『スペンサーコレクション蔵 日本絵入本及絵本目録』(弘文荘、初版一九六八年、増訂再版一九七八年)を編纂していることが知られています。今回閲覧した数書にも『月明荘』の陽刻朱方印が認められ、反町氏から購入したことが確認できます。



「月明荘」印

絵入り本及び絵本類の研究は長年国文学者から関心を集めており、その成果として近年、人間文化研究機構国文学研究資料館から『アメリカに渡った物語絵―絵巻・屏風・絵本』(ベリカン社、二〇一三年)、『絵が物語る日本―ニューヨーク スペンサー・コレクションを訪ねて』(三弥井書店、二〇一四年)が相次いで刊行されていますが、コレクショ



ニューヨーク公共図書館 外観

ン中には仏教書も少なからず存在しています。以下一例を紹介します。

『五智五藏等秘密抄』の作者・成立年

前掲目録No.23を見ると

釈道筑著『五智五藏等秘密抄』一卷。正安三年写(三〇二年、傍点筆者、以下同様)

とあり、実見の結果、卷子本の奥書後に継いだ紙の裏書の記述を採録したものでした。従来この書名の作者は高野山八傑に数えられた道範(一一八四―一二五二)であり、道範なる人物はこれまで知られていません。そして実際には例えば外題に、

五智五藏等秘密抄 道範 杲寶

とあり、目録が「範」の崩し字を「筑」としたことが判明しました。奥書による限り、

嘉禎二(一二三〇)年八月廿一日 禪定太王教命撰集之阿闍梨道範

とあるので、道範が五十三歳時の撰述となります。

二日目の会場となった四祖寺は、湖北省黄梅県双峰山の山中に位置する禅宗の古刹で、創建は六二四年と伝えられます。古くは幽居寺と称し、また正覚寺の名を持ちますが、創建者の禅宗第四祖、道信に因んで、現在は「四祖寺」の名で親しまれています。今なお道俗が修行する禅の道場で、私たちも在家者用の宿坊に起居し、その禅風の一端に触れることができました。



四祖寺

二日目は三名の先生の基調講演に続いて、七つのセッションが行われました。朝八時から夜一〇時までという修行のように厳しいスケジュールでの開催でしたが、参加者全員がテーブルを囲み、各発表者に一人のコメントーターが付いて、フィードバックを行いながらのセッションは、大変密度の濃いものでした。

本学戦略プロジェクトからは、以下の五名が参加し、発表を行いました。

スペンサー本の由来

外題にある所持者、杲寶(一三〇六一―一三六二)は東寺観智院の第一世であり、また『国書総目録』(一九七三年)には当該書の諸本として「大谷大学(寛文二年(一六六二)写・金沢文庫・観智院金剛藏(正安三年写)」の三本を取り上げます。

観智院が正安三年書写本を有する記述と、スペンサー本が観智院第一世杲寶の所持を伝え、正安三年の奥書を有することを勘案すると、この二書は同一本であると比定できそうです。よってスペンサー本は『国書総目録』に採録された後に反町氏の手を介して海を渡ったと考えるのが妥当かもしれません。

スペンサー本の本文には金沢文庫本にはない裏書きを書き留めていることが大きな特徴です。稀観書を実見・調査することにより、研究上の課題が見えてきました。今後の諸本比較や位置づけなどの解明が期待されます。

【参考文献】

- ・菅谷明子『未来をつくる図書館―ニューヨークからの報告』(岩波新書、二〇〇三年)
- ・『日本絵画名作展 ニューヨーク・パブリック・ライブラリー所蔵』(神戸市立博物館、一九八七年)
- ・反町茂雄「古書肆の思い出」全五巻(平凡社ライブラリー、一九九八年)
- ・国文学研究資料館蔵書印データベース (<http://www.ri.ac.jp/>)
- ・落合俊典「スペンサー本の道範撰『五智五藏等秘密抄』(前掲『絵が物語る日本』)

(南 宏信)

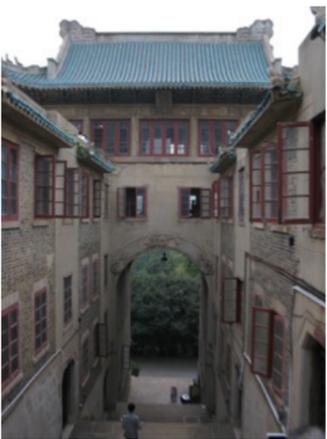
活動記録

国際学術検討会

仏教文献と文学

二〇一四年一〇月一八日・一九日に、中国武漢大学および四祖寺において、国際学術検討会「仏教文献と文学」が開催されました。

このシンポジウムは、二〇〇七年に京都大学人文科学研究所、台湾南華大学文学系、国際仏教学大学院大学の共催で始められました。当初は日本と台湾の研究者の交流を目的としていましたが、第三回目を迎える今回は、開場を中国へと移し、武漢大学文学院・中国宗教文学與宗教文献研究中心、台湾南華大学文学系、国際仏教学大学院大学の共催のもと、中国、台湾、日本、マレーシアから総勢四十九名の発表者が参加する大規模なシンポジウムとなりました。



武漢大学

二日間に渡る九つのセッションでは、文学を中心に、文献学、言語学、仏教学、各分野の研究者による、三国時代から現代に至るまでの仏典や文学作品を対象とした、様々な研究発表が行われました。初日の会場となった武漢大学は、その前身が清代に遡る、中国でも歴史ある大学の一つです。キャンパスは東湖に面し、珞珈山という丘を擁する風光明媚な場所にあります。開会式では、落合俊典本学学長より、武漢大学と四祖寺に、日本古写経研究所善本叢刊が贈呈されました。初日には各セッションに先立って、三名の先生の基調講演があり、続いて二つのセッションが行われました。その後、一行は一路、四祖寺へ。

基調講演

落合俊典(国際仏教学大学院学長)

「智嚴撰『楞伽經』―現存日本の若干文本―」

第三セッション

池麗梅(鶴見大学仏教文化研究所准教授)

「法苑珠林」成書考」

第四セッション

本井牧子(筑波大学人文社会学系准教授)

「清凉寺蔵『釈迦堂縁起』之仏伝」

第六セッション

三宅徹誠(元興寺文化財研究所研究員)

「関於『賢愚經』各版本系統的考察」

第七セッション

山野千恵子(国際仏教学大学院大学研究員)

「龍樹菩薩伝」的成立過程」

閉会式では、四川大学周裕鐸教授より「夜宿四祖寺」「四祖寺仏教研討会有感」と題する美しい漢詩が披露されました。二日間に渡るセッションを通して、中国における文献学的な仏教研究の現在の概況を把握することができ、また敦煌文献を用いた新たな研究についての情報を得ることができたのは、大きな収穫でした。インターネット時代になって、海外の研究にも比較的容易にアクセスすることができるようになりましたが、近接分野の研究者と交流し、情報交換をすることの意義を大きく実感した国際シンポジウムでした。

(山野千恵子)

東アジア仏教写本研究

二〇一四年七月二六、二七日、本学春日講堂において、東アジア仏教研究会（会長：糞輪顕量（東京大学）との共催による国際シンポジウム「東アジア仏教写本研究」を開催した。発表者、及び発表題目は以下の通り（所属、役職等は開催当時の表記）。

第一部会 大乘義章

- 司会 永村眞（日本女子大学教授）
コメント 糞輪顕量（東京大学）
岡本一平（恵泉女学園大学非常勤講師）
「大乘義章」のテキストの諸系統について」
田戸大智（本学日本古写経研究所特任研究員）
「大乘義章」の修学について―論義書を中心に―」
金 天鶴（東国大学校学院H.K教授）
「新羅仏教における『大乘義章』の影響」
第二部会 在家人布薩法
司会 方廣鎬（上海師範大学教授）
コメント デレアヌ フロリン（本学教授）
赤尾栄慶（京都国立博物館学芸部上席研究員）
「重要文化財『在家人布薩法巻第七』について―書誌学的観点から―」
落合俊典（本学学長）
「敦煌本（P.2196）と『在家人布薩法』（重文・神谷本）の比較から見えるもの」
Sylvie Hureau (EPHE)
The recitation of precepts for lay followers according to the Zaijaren busa fa

第三部会 テキスト研究の展開

- 司会 高橋秀栄（神奈川県立金沢文庫元文庫長）
楊 婷婷（本学プロジェクト研究員）
「菟足神社蔵『大般若経』の欠筆と則天文字について」
小島裕子（本学日本古写経研究所特任研究員）
「興聖寺蔵伝解脫房貞慶筆唯識の書―一切経に付随して伝来した聖教―」
金水 敏（大阪大学大学院文学研究科教授）
山田昇平・中野直樹（同博士後期課程）
「日本語資料として見た岩屋寺蔵『高僧傳』について」
辛嶋静志（創価大学国際仏教高等教育研究所教授）
「法蔵部『長阿含経・十上経』漢訳に見える説一切有部の『浸食』」
林寺正俊（北海道大学大学院文学研究科准教授）
「日本古写経本『三法度論』の資料的意義と問題点」
崔 鈺植（東国大学校史学科副教授）
「海印寺白紙墨書写本に関する基礎的考察」



落合俊典（本学学長）

- 「徳川美術館蔵『神通論』の解説―著者同定への階梯―」
赤尾栄慶（京都国立博物館学芸部上席研究員）
「高山寺旧蔵『安樂集』の古写本―書誌情報について―」
「高僧傳」テキストの變遷と流傳
―日本古寫經による検証―
齊藤達也（本学附属図書館員）
「七寺一切経中の『統高僧傳』の二本について」
池 麗梅（鶴見大学仏教文化研究所准教授）
「五月一日経本『統高僧傳』の文献的特徴」

第四部会 高僧伝統高僧伝

- 司会 大内文雄（龍谷大学特別任用教授）
コメント 齋藤智寛（東北大学准教授）
定源（上海師範大学哲学学院敦煌学研究所准教授）
「高僧傳」テキストの變遷と流傳
―日本古寫經による検証―
齊藤達也（本学附属図書館員）
「七寺一切経中の『統高僧傳』の二本について」
池 麗梅（鶴見大学仏教文化研究所准教授）
「五月一日経本『統高僧傳』の文献的特徴」
総合概評 Jeanhoal ROBERT
(コレージュ・ド・フランス教授)

本シンポジウムは文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジア仏教写本研究拠点の形成」として活動してきた五年間の成果である。

本プロジェクトは北宋開宝蔵を嚆矢とする刊本大蔵経開版以前の仏教テキストの実態を探索するものであり、具体的手法として、唐代写経を底本とする奈良写経に着目しつつ、その数的欠を補う為、奈良写経の転写本と目される平安、鎌倉期の写本大蔵経を収集、データベース化することで、唐代写本大蔵経の内容



を疑似的に再現するものである。五年間にわたる調査を通じ、多くの仏教写本に接する機会を得、それらの一部を日本古写経善本叢刊として公刊してきたが、本シンポジウムは、そこで取り上げた文献以外、或いは刊行以降に判明した知見等を公表するものである。何れも古写本を通じての解明、新知見の発表であり、それらは日本に現存する仏教写本の学術的価値を実証し、宣布するものと言えよう。

本シンポジウムを通じ、今後とも日本古写経データベースが多くの方向に利用され、基盤として研究の発展に資することを願って止まない。

当日は百名を超える方方にご参加をいただき、盛況のうちに終了致しました。沢山の御来臨、誠にありがとうございました。
(上杉智英)

公開研究会

昨年度第2回公開研究会、並びに今年度第1回、第2回公開研究会について、概要を報告致します（発表者の所属、役職等は研究会開催当時の表記です）。

○平成25年度第2回公開研究会

平成25年11月9日（土）
午後3時〜4時半
於 国際仏教学大学院大学 春日講堂

- 赤塚祐道（本学日本古写経研究所特任研究員）
「密教経軌と請求目録との関係―金剛寺聖教を中心に―」
三好俊徳（名古屋大学大学院文学研究科研究員）
「真福寺大須文庫所蔵『阿婆縛抄』古写本について」



平成25年度 第2回公開研究会

赤塚氏は天野山金剛寺に所蔵される平安時代院政期書写の密教経軌について、同寺に現存する空海（七七四―八三五）撰『請求目録』の古写本、並びに『御請求録之内不足目録』『目録 新請求ノ外』『本経儀軌目録』、また『貞元録』と対照することにより、それらが一切経とは異なる請求経という認識の下、『貞元録』ではなく『請求目録』を範として書写・蒐集されたものであることを実証された。

三好氏は真福寺大須文庫に現存する鎌倉時代書写『阿婆縛抄』の一部である『反音鈔』二点、『字記正決』一点を紹介され、奥書、本文の検討により、これらが『阿婆縛抄』の未再治本であることを明らかにされると共に、何れも悉曇学書であることに着目し、これら三点の伝来の意味を、真福寺における悉曇学の重視にあると、同寺の学問体系中に位置づけられた。

○平成26年度第1回公開研究会

平成26年5月10日（土）
午後3時〜4時半
於 国際仏教学大学院大学 春日講堂

- 佐藤礼子（京都大学非常勤講師）
「義浄の訳経事業と唐代伝奇」
藤原重雄（東京大学史料編纂所助教）
「桂大納言入道（葉室光頼）出家後の動向―岩屋寺蔵『高僧傳』訓点に寄せて―」



平成26年度 第2回公開研究会

佐藤氏は「根本説一切有部毘奈耶雜事」にみられる虚構と文学性、並びに宋代章回小説に類似する文章構成に着目し、『開元録』の別生経の記録、並びに現存する唯一の根本説一切有部律の別生経である七寺蔵『勝光王信仏経』により、義浄による説一切有部律の別生経訳出の意図を、説教の場における台本の生成とされ、それは唐代伝奇文学の隆盛に先行するものであると中国文学史上に位置付けられた。

藤原氏は、従来知られていなかった桂大納言入道（藤原光頼、一一二四―七三）の出家後の動向を伝えるものとして、尊経閣文庫蔵『大納言入道灌頂記』を紹介され、その生涯は、実務官僚として活躍した貴族が出家・遁世して仏教に精進し、文化的な営みを行うという、中世前期における実務系貴族のライフコースの典型的事例であることが明らかにされた。

○平成26年度第2回公開研究会

平成26年11月8日（土）
午後3時〜4時半
於 国際仏教学大学院大学 春日講堂

- 小島裕子（本学日本古写経研究所特任研究員）
「二一切経と一切経会
―経供養という法会儀礼の観点から―」
矢野道雄（京都産業大学特任教授）
「宿曜経の大蔵経本と和本の比較」

小島氏は一切経会に言及する公家の日記等を蒐集すると共に、その具体相を記すものとして、仁和寺蔵紺表紙小双紙『所収』法金剛院一切経会次第『唐本一切経供養』『唐本一切経供養堂莊嚴儀』成俊唐本一切経供養略次第』を紹介し、一切経会の次第展開を明らかにされた。

矢野氏は、空海によって将来された不空訳『宿曜経』を祖本とする日本現存の古写経本を紹介されると共に、大陸系の版本大蔵経本と比較対照することで、両者の相違を明示し、日本に伝存する和本が、版本大蔵経本よりも原型に近いことを実証された。

25年度第2回公開研究会、26年度第1回、第2回公開研究会ともに、多数のご来場を賜り、誠にありがとうございました。今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。
(上杉智英)